

新 歌人群像

原 阿佐緒

白木槿のひと

秋山佐和子

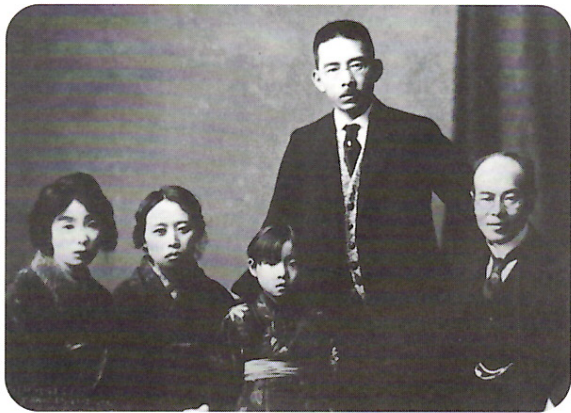


塩屋のおじさん

歌人、原阿佐緒は、明治二十一年（一八八八）年六月一日に、宮城県黒川郡宮床村（現大和町宮床）に父幸松と母しげの初めての娘として生まれた。宮床は仙台から二十キロ程離れた緑深い山里である。阿佐緒の産声は、青々とした早苗田にも渡っていったことだろう。

原家は代々塩や糶の販売を許された素封家で、進取の気性に富む父は白壁塗りの二階建ての洋館を建てた。広い敷地内には米や味噌や農具の蔵が建ち、門の内側には小作米を運ぶ馬を繋ぐ馬柵が並んでいた。碧眼の牧師たちが訪れ、バイオリンが奏でられたというこの白壁の家は、修復されて現在、「原阿佐緒記念館」として一般に公開されている。百数十年を経てもびくともしない重厚な造りの家は、明治の建造物として価値あるものと思われる。

原家の一人娘の阿佐緒は、「塩屋のおじさん（お嬢さん）」として大切に育てられた。教育熱心な両親の元、幼時から日本画を習い、家庭教師について小学校も吉岡や角田に越境通学をした。勝ち気な阿佐緒は学業に励み、成績はつねに優秀だった。



左より阿佐緒、三ヶ島霞子、霞子の娘みなみ、霞子の夫倉片寛一、石原純（1920年）

しかし、阿佐緒に最初の不幸が襲う。眼病を患っていた父が「阿佐緒のために全財産を使うように」との遺言を母に残して亡くなったのだ。阿佐緒はまだ十三歳だった。同じ年に祖父も亡くなった。自分を溺愛し大いなる庇護者であった男親との永遠の別れは、阿佐緒に深い喪失感、無常感、漂流感を植えつけたのではなからうか。遠縁の遠藤家から迎えられた養嗣子真剣も、宮城県高等師範学校在学中に結核で亡くなった。真剣の死は阿佐緒が十八歳の時だが、多感な思春期に次々に身内の死に見舞われた阿佐緒の心中が思われる。

生と死のいづれの海にただよへる吾とも知らずいくとせか経む
 『涙痕』
 白むくげ秋来て咲きぬ末の世のわが尼姿見る心地して
 同

歌集『涙痕』に収められたこの一首目の不安感や、二首目の尼姿への願望などは、肉親の死が、暗い影を落としているといえよう。

明治三十四（一九〇二）年、阿佐緒は仙台の県立宮城県高等女学校に進学した。この頃の阿佐緒の写真が数枚あるが、切れ長の目は涼しく、気品と艶を含んだ愛らしい口元で、生まれながらの美貌だったことがよく分かる。勉強もよく出来、漢詩や英語などに頭角をあらわしたが、肋膜炎を病み三年で中途退学した。家で療養につとめながら阿佐緒は叔父から漢詩を習い、西洋の書物を読みふけり、日本画を学んでいた。

歌との出会い

やがて病状が回復した阿佐緒は、明治三十七年、日本女子美術学校に入学した。下中弥三郎（のちの平凡社社長）に短歌の手ほどきを受け、英語と美術史の教師小原要逸（無弦）に出会う。ロセッチやユーゴーの翻訳詩集を

刊行している詩人の小原は阿佐緒にとって憧れの人であったろう。恋とも愛ともいまだおぼろげな中で阿佐緒は妊娠する。小原に妻子があることを知って自殺をはかるが失敗。学校も転校し二十歳で長男千秋を出産した。母のたつての願いもあり、小原は離婚したのちに阿佐緒と結婚。宮床村で華やかな披露宴を開いた。しかし、ほどなく二人は離婚する。誇り高い阿佐緒は、小原への不信感が払拭できなかったのだ。

明治四十二（一九〇九）年四月、阿佐緒は仙台市の宮城女学校の美術教師となった。阿佐緒も考案に関わったという、聖書と鳩を中心に宮城野萩を丸く象った美しい校章は、現在も宮城学院で使われている。

また、この四月に、阿佐緒は歌人としてのスタートを切った。当時、女子の文学登龍門といわれた文芸雑誌「女子文壇」の与謝野晶子選の短歌欄で天賞となったのだ。

この涙つひにわが身を沈むべき海とならんを思ひぬはじめ

阿佐緒の歌の出発が「涙」であったことは感慨深い。嘆きの涙が海となる、という激しい思いが流麗なうねるような調べで歌われている。与謝野晶子は、この「陸前 原あさえ

原阿佐緒

新 歌 人 群 像



原阿佐緒と石原純（年代不明）

こゝに、抒情歌人としての素質を見抜く。晶子の適切な指導を経て、「スバル」の「新詩社詠草欄」に、三ヶ島霞子や、岡本かの子らと共に阿佐緒の短歌も掲載されるようになった。さらに、平塚らいてうの「青鞥」にも、おそらく晶子の推薦からだろう、霞子やかの子らと共に阿佐緒も短歌や文章を発表している。

歌の道

こうして短歌一筋の道を選んだ阿佐緒は、大正二（一九一三）年五月、第一歌集『涙痕』を刊行した。与謝野晶子が「純粹の抒情詩を作る人……」との序文、吉井勇が序歌五首を寄せ、その出発を祝福した。

春の雨傘にきよくふりそぐ君に逢ふ
とき鳴る胸のごと

吾がために死なむと云ひし男らのみな
ながらへぬおもしろきかな

生きながら針に貫かれし蝶のごと悶へ
つゝなほ飛ばむとぞする

湯をくみて馬をば洗ふ馬だらひに円き
鏡をうつす大空

歌集『涙痕』には文字通り涙の歌が多いが、ういういしい恋心、やや皮肉な自嘲、自立を願うひたすらな心、そして実生活に根ざした中で詩情を汲み取る歌もある。「馬だらひ」の歌などは、新詩社の浪漫的、主情的傾向から、自然を見つめた客観的写生主義の「アララギ」へと移行する萌芽の歌と見てよいだろう。事実、阿佐緒は『涙痕』刊行に先立つ三月に「アララギ」に入会している。これには、仙台の短歌雑誌「シヤルル」創刊をきっかけに知り合った、「アララギ」の古泉千樫の力が大きい。当時二人の間に短い交情があったことは、千樫の相聞歌から知られる。

大正三年、阿佐緒は幼なじみで芸大を卒業した画家庄子勇と結婚し上京した。「女子文壇」時代からの親友、三ヶ島霞子が結婚して神田猿樂町に住んでいたのを訪ねたり、霞子

の長女みなみと、ひと月違いで生まれた阿佐緒の次男保美と四人で撮った写真もある。しかし夫は阿佐緒が短歌を作るのを好まなかった。

人妻はかなし歌よむことをさへみそか
ごとするごとく恐るる

黒き蜂うなりひそめて咲き盛る木槿の
花に籠るしまらく

大正五（一九一六）年刊行の『白木槿』の歌である。阿佐緒は歌集の自序に「『白木槿』を分水嶺として新しい道程にのぼりたい心持ちからこの集を出すことにしました」と、その心構えを綴っている。夫を東京に残し帰郷しての刊行だった。つまり、阿佐緒は夫よりも歌を選んだのだ。一首目に歌ったような、夫に隠れ恐れつつ歌を作る生活、それを我慢することはない。阿佐緒は小原と別れた時と同じく、どんなに悩み、嘆こうとも、最後は強く誇りある女性として自分の道を選ぶ人だった。阿佐緒の歌はこの二首目のように、蜂のすばやい動きとうなり声を確かに描写した歌となっていく。

だが、運命は皮肉だ。歌の表現の高みを目指して、仙台「アララギ」の歌会に出席するようになった阿佐緒は、「アララギ」の重鎮



女優時代の阿佐緒（右）。映画「佳入よ何処へ」出演時（1932年）

であり、アインシュタインを初めて日本に紹介した東北大学理学部教授の石原純と出会う。夫と協議離婚した阿佐緒に言い寄ってくる男性は多く、石原純は初めは阿佐緒の庇護者のような気持ちであったが、次第に恋情を燃やしていく。阿佐緒の歌の手帖に添削を施しながら何時かそれが恋文めいたものになっていくのだった。阿佐緒はそれを恐れて、三ヶ島葎子のいる東京に逃れる。が、妻子も職も名誉も全て擲って上京してきた石原純を、阿佐

緒は拒みることができなかった。

大正十（一九二二）年七月三十日、新聞各紙はこの事をスキヤンダラスに報道し、一方的に「妖婦」と嘲罵された阿佐緒と、阿佐緒を擁護した文章を書いた三ヶ島葎子は「アララギ」を追われた。この秋に、阿佐緒は第三歌集『死をみつめて』を刊行する。

時雨ふるみちのくの街のひろ道に鴉降り
あゆむ人の見えねば

山に来てひとり鉦振る自らのさびしき
ふりもいまはなげかぬ

傘かたげ背の子に見す天ぎらふ空鳴き
渡る鴉のむれを

實際といわれた歌集だが、斎藤茂吉や島木赤彦に師事した阿佐緒の、自然を広い心で眺め、自己を受け入れ、母と子の普遍的な情愛を歌う秀歌が多い歌集である。この後、石原純と共に、千葉の保田の瀟洒な洋館に住んだ阿佐緒だったが、昭和三（一九二八）年ひとりで帰郷した。同年、『うす雲』が刊行され、石原純は長い序で、「いつも病身な彼女の、只生来の心まさりのみが彼女を激まして自分の道に精進することを努めさせてゐます」と記した。

山裾に大きくまはりゐる水ぐるま捲き
かへすしづき日に光り見ゆ

ふるさとを静かに悲しく歌う阿佐緒だった。このうち、阿佐緒は流転の人生を辿る。

女は若くあらねば職業を得られずとふ
社会に吾も老ゆ

歌よみの阿佐緒は遂に忘れられむか酒場
女とのみ知らるるはかなし

この歌にもあるように、バーの雇われマダムや、映画の主演女優などを経たあと、阿佐緒は故郷に再び帰り、もう歌うことはなかった。晩年は、次男で俳優の原保美のもとに引き取られて穏やかな老後を送り、昭和四十四（一九六九）年二月、享年八十歳で亡くなった。

阿佐緒の生き方や歌の内容が現代につながるテレパシーを持っているからだろう。故郷には地元の人々により歌碑が三基建てられ、原阿佐緒記念館も入場者が多いと聞く。不思議な魅力をたたえた歌人である。

〈参考文献〉

『原阿佐緒全歌集』（小野勝美編・至芸出版社）

（あきやま・さわこ）「玉ゆら」主宰